いたみカルチャーニュース

アイテム

NO.1

カーテンコール

新屋英子

一人芝居・インタビュー

人・ことば

大谷晃一

関西文化について

特集

ラスタホール・アイホール・
伊丹アイフォニックホール紹介

いたみブラリ散歩

おととい、きのうと、木枯らし一号とかいう寒い日が続いたが、きょうは朝からポカポカ陽気。土曜日ということもあったが、市役所付近は閑散としていて、図書館横のニセアカシヤもまばらに色づき始め、日溜まりのベンチで若い二人連れが、なにか飲物を手にして話し込んでいる。暑くもなく寒くもない風が時折吹いて、黄色い葉っぱを二、三散らしていた。少し、調べものをしようと図書館にはいったが、探しものが見つからない。

所在なく階下に降りて、博物館のロビーを見ると、なにかビデオをやっている。この種のものをあまり見たことはないが、足も疲れていたのでソファに座ってぼんやり見ていると、伊丹の昔を写しだしていた。そばの受付の人も、ほかに客がいないので、「家族ビデオなんかと違って、素人がよく撮っているでしょう」などと解説してくれた。昔といってもおそらく昭和初期、カメラアングルといい、モンタージュといいしろうとどころか、とてもただものではない。ナレーションで「ここはどこだかわかりますか、そうです、千僧。この松原の道が西国街道…」いまの市役所付近の田植え風景なども。

ついでに、「近衛家陽明文庫」の展示も見ようという気になり、覗いてみた。近衛家十何代かの家熙という人の植物画には眼をみはった。円山応挙より10年以上前の人ということだが、わが国写実画家の嚆矢といってもいいのかもしれない。思いがけずいいものを見た。

エッセイスト　北田　洋平

伊丹市立図書館南分館

発行／㈶伊丹市文化振興財団　伊丹市南野字矢倉塚720-2(ラスタホール内)　TEL0727-81-8877　FAX0727-81-9292

カーテンコール

客席との交流の中から、新しい舞台が生まれる

ひとり芝居女優　新屋英子さん

伊丹市内で、10月4日、7日、17日、20日の4日間上演された新屋さんのお芝居を、2300人の伊丹市民が観劇しました。
1928年生まれの新屋英子さんは、とてもお元気で、激しい舞台を勤められた後とも思えないさわやかさで、応じてくださいました。演出はご主人の鶴野昭彦さんです。

―在日朝鮮人一世の身の上話の『身世打鈴（シンセタリョン）』は、一四〇〇回以上も上演されたそうで、すごいですね。何年間ですか。

新屋　一九七三年の初演から二十二年になります。

―最初に、これをレパートリーとして取り上げられたきっかけは。

新屋　二十二年前と言いますと、昭和四十七年ごろですが、当時アングラといいますか、大劇場ではない、小さな小屋とか喫茶店、テントなどで、シバイをすることがはやっていました。私もやってみたいと考えていましたとき、たまたま在日朝鮮人の婦人から、〝むくげの会〟の方たちが聞き書きした『シンセタリョン』（身の上話）という本に出会いまして、とても感激したものですから、それを脚色して、四月二十八日と二十九日の二日間で、四回上演しました。

―それから、ずっと……

新屋　いいえ、そのときはそれっきりで。その後五年くらいはやっておりませんの。最初のとき、もうシンドクって、シンドクって、ギックリ腰になって……、もうたくさんと思っておりました。

―それが、またここまで続いたのは。

新屋　教科書裁判の家永三郎先生から、一九〇〇年生まれの女性が一〇〇人くらい集まるから、そこで上演してくださいというお話があって、それからです。いまでは、日本各地で、やらせていただいていまして、まだやってないのは、青森県と秋田県だけなんですよ。

―初めのころと現在では、内容も変わってきたでしょうね。

新屋　そうです。最初は、三十分くらいのものでしたし、ずっと座ったままで、おしゃべりしていました。いまのように、朝鮮の民話などは入っていませんでした。

―いま新屋さんの表情も、絶望を突き抜けた人の明るさとでもいうような感じが出ていて、とてもいいですね。

新屋　そうですか。緊張がとれて、舞台の人物が肉体化してきたということでしょうかしら。

―新屋さんのおシバイは、小劇場向きといいますか、舞台からお客さんに話しかけるということをなさっているようですが、いまのように舞台がふくらんできたのは、やはりお客さんとの交流で。

新屋　そうです。ずいぶん、お客さんに教えられます。
私たち日本人は、ほんとうに向こうのことを知らないですよね。一九四八年の済州島の大虐殺のことも、これをやっているうちに知ったのですけれど。

―おシバイの中に出てきましたね。どういうことですか。

新屋　第二次大戦が終ったあと、済州島で占領軍や日本などに対して、大きな抵抗運動が起こったらしいんです。済州島は、日本などで勉強してきたインテリが比較的多い土地柄なので、そんなことも影響したのでしょうね。その人たちを、すべて逮捕して虐殺してしまったらしいのです。そんなことも日本の教科書には出てないでしょう。それが、朝鮮戦争の引き金にもなり、その後の三十八度線による南北朝鮮の分断につながったわけです。

―なるほど。ところで、伊丹で上演されたもうひとつ『ヒミコ伝説』は部落問題ですね。

新屋　部落の方も在日の方も、まだずいぶん差別されているわけですが、そういう認識が、まだまだ希薄なように思われますので、これからもおシバイを通じて、みなさんに、知ってもらいたいと思っています。

―がんばってください。ありがとうございました。

情報誌発行に寄せて

伊丹市長　松下　勉

秋は、なぜか人を読書や創作や観賞の世界に誘います。忙しい現代人だからこそ、自身の時間・空間を見つけることが、今を心豊かに生きる極意です。
文学、美術、音楽、スポーツなどさまざまなジャンルがあなたを歓迎してくれます。行政も、市民のみなさまがほんとうに豊かな生活を創造できる基盤を作ってまいります。
今回、あなたに、ほんの少しだけお役に立つ情報誌をつくりました。
あすから、また新しいあなたを再発見してください。

財団設立三周年を迎えて

伊丹市文化振興財団理事長
水川金苗

お陰を持ちまして、財団も三歳を迎えました。市民に愛され、ニーズに応えるべく、役員、職員一同努めていますが、財団の存在もようやく知られ始めたところでありましょうか。
いま、価値観の多様化の時代、文化・学習の事業も、市民の声を十分くみとらなければ成功いたしません。
これからも、常に「新鮮な事業」に心がけ、文化振興に邁進いたします。引き続きご支援賜りますようお願い申し上げます。

グループ訪問

Enjoy Life

伊丹民踊協会・南丹会

指導　小野敏夫さん
☎0727-82-5684

伊丹市内には、たくさんの市民グループがあります。第一回は、毎週木曜日の午前中、ラスタホールで稽古を続けている民踊のグループを訪ねました。
ホールのドアを開けると、カセットデッキから流れる曲にあわせて踊っている人の数に、ちょっとびっくりです。五～六〇人が、三重の輪になっているのですが、ホールいっぱいなのです。伺ってみると、一昨年の五月に三十人ほどで始めたこのグループの会員数は、現在八十五名だそうです。
『地蔵盆唄』、『花笠踊り』とみなさん濃みなく踊っていきます。足の振りがちょっと複雑な『ソーラン節』のとき、指導の小野敏夫さんが真中に入りました。「チョーイヤサ、ドッコイショ、ちゃんと合うようになってますねんけどね」、ドッとなごやかな笑いがはじけます。
小野さんは、日本フォークダンス連盟の指導員です。民踊は日本のフォークダンス、違うのは、ペアにならないで一人で踊れるところです。十数年前、足が悪くなった小野さんは、相手に迷惑を掛けないようにと、民踊に移りました。でも踊っているときは、とてもそんなふうには見えません。

人気の秘密は指導者と和気あいあいの雰囲気

伊丹に伝わる民謡の伝統「麦わら音頭」

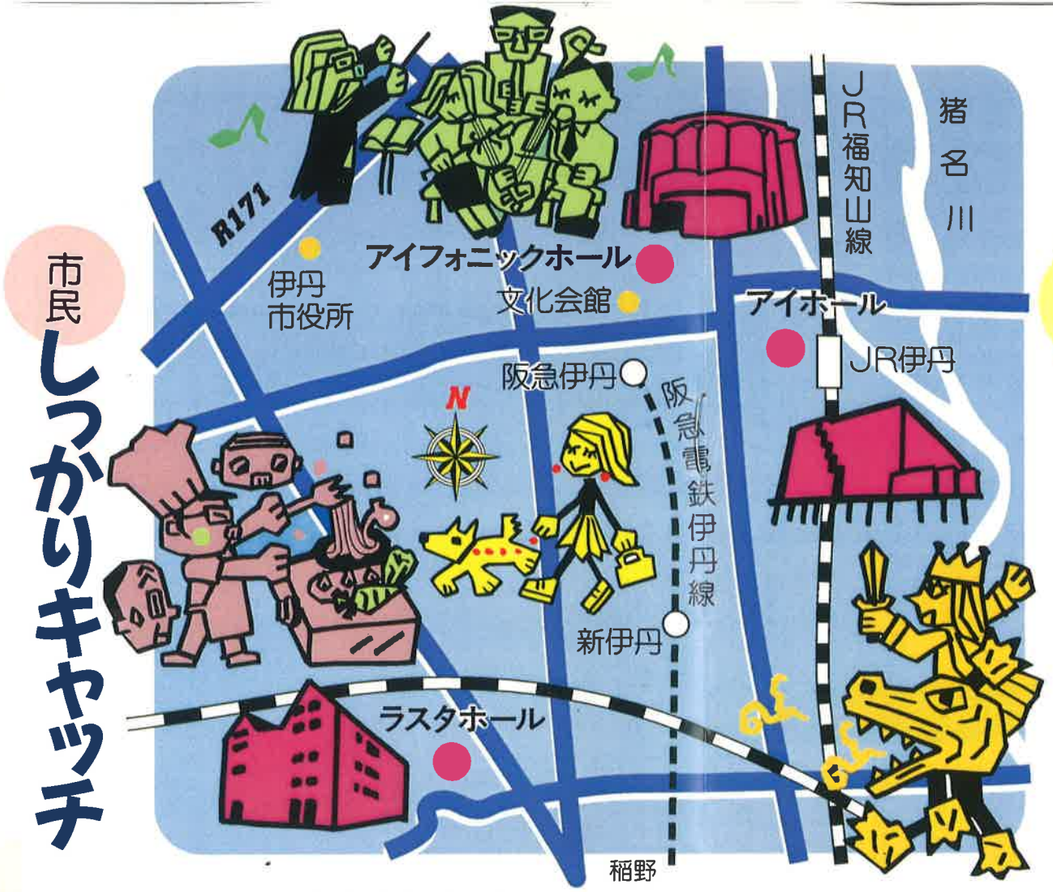
どうしてこんなに人気があるのか、このグループができるよりずっと前から踊っているという会員の一人、大門さんは、「とにかく小野先生のお人柄がいいので」とおっしゃいます。大門さんは、三年前にご主人を亡くしました。寝たきりのご主人の看病の四年間を乗り切れたのは、「民踊のおかげです」と。
また、盆踊りで、民踊に興味を持ったという松原さんは、いまは会員のみなさんとの年一回の旅行がとても楽しみということです。
日本民謡のやさしいリズムに身をまかせると、自然に人柄もおだやかになるのでしょうか。なごやかさが伝わってくるグループです。
この教室は満員ですが、市内の各所に三十五も民踊のグループがあるそうです。伊丹には、無形文化財の『麦わら音頭』などもあり、民謡・民踊を愛する伝統があるのかもしれませんね。

学習文化 いきいき発信

伊丹市立生涯学習センター **ラスタホール**
伊丹市立演劇ホール **アイホール**
伊丹市立音楽ホール **伊丹アイフォニックホール**

伊丹市の文化行政は、そのユニークな運営理念が、全国的にも注目されているのはご存じの通りです。この中核をなしているのが伊丹市立生涯学習センター「ラスタホール」、そして演劇・ダンスの「アイホール」と音楽の「伊丹アイフォニックホール」です。建物だけなら、他市にもこのようなホールを持つところはありますが、伊丹市の場合は、プロデューサーシステムを採用し、その人材を民間に求めて、ハード(建物)だけでなく、ソフト(運営)がしっかりしている点が、高く評価される所以でしょう。

それぞれ独自の運営方針を持ちながら、それらが調和して、文化のまちづくりを支えています。



●アイホール外観

〒664 伊丹市伊丹2-4-1
Tel 0727-82-2000
アクセス JR伊丹駅前

■関西の小劇場演劇のメッカ
「アイホール」

ＪＲ伊丹駅前という地の利もあるのでしょうが、オープンして６年のこのホールは、関西の小劇場演劇のメッカになりつつあると言っても過言ではないでしょう。

ホールの床が35に分割され、それぞれが上下に可動するイベントホール(１Ｆ)は、演劇・ダンスのほか、音楽会、映画、講演などにも利用されています。２、３階にはカルチャールームがあり、演劇学校などもここで開催されています。

もと『扇町ミュージアムスクエア』のプロデューサーで、その手腕を買われて開館当初からの演劇プロデューサーである津村卓さんは、「会場の提供だけではなく、自主製作によって〈伊丹発全国へ〉を基本姿勢に」しています。この製作方法はアイホールプロデュースと呼ばれ、作家、俳優、演出家などを、関西だけでなく東京や名古屋などから招いて、ひとつの舞台を作りあげ、各地で公演します。アイホールプロデュース第一回の『砂と星のあいだに』(1990)以来、『花々の眠る部屋』(1991)、『岸田國士戯曲SHOW』(1992〜3)と全国的に注目されています。

また、ダンスプロデューサーの志賀玲子さんは、「まだダンスには、お客さんが少ないのですが、言葉のないダンスはダイレクトに訴えるものがあります。自主公演の『ダンスコレクション』のほか、一般の人に自分の体に興味を持ってもらえるような講座、ワークショップなどに力を注いでいきたい」と意欲的です。

●伊丹アイフォニックホール

〒664 伊丹市宮ノ前1-3-30
Tel 0727-80-2110
アクセス JR伊丹駅から徒歩7分、 阪急伊丹駅から徒歩5分

■ユニークな企画で音楽文化の向上に
「伊丹アイフォニックホール」

伊丹市立美術館、柿衛文庫館などにほど近く、音楽ホール「伊丹アイフォニックホール」があります。伊丹市のシンボル的存在の酒蔵などもあるこのあたりは、文化のかおりに満ちています。ここの自主事業は、『世界の諸民族の音楽』がテーマで、こうしたテーマを持つ音楽ホールは、全国でもここだけです。音響などにも配慮の行き届いたホールの客席は502席。１階には、ティールームのほか、レストランなどもあり、音楽会のあとのフォローも万全です。

諸民族の音楽といえば、この方という西岡信雄先生（大阪音大教授）が開館当初からのプロデューサーです。西岡先生は「民族音楽という言い方は、白人が差別的に用いた言葉ですから好ましくありません。私は、五大陸―ユーラシア、アフリカ、オーストラリア、南・北アメリカ―と日本の音楽をバランスよくということを、考えてやってきました。こういう視点は、おしきせの〈買取りメニュー〉にはありません。他市がやらないユニークなものというのが、このホール開館のときからのコンセプトですから、年間10公演のうち、半分は自主企画です。ただ、音楽文化の向上というようなものは、即席で効果があがるものではありません、10年、20年の視野が必要ですね。」とおっしゃいます。

自主事業のほか、シティフィルハーモニー、市民オペラ、吹奏楽団、伊丹太鼓、少年少女合唱団などの定期的練習の場としても、活用されています。

●エントランスホール

●マイコン室

●図書館お話し室

●ラスタホール外観

■伊丹市民の文化・学習の発信基地
伊丹市立生涯学習センター「ラスタホール」

ラスタホールを入ると広いロビー、５万冊の蔵書を持つ図書館が目につきます。２階には300人収容の多目的ホールがあります。そして３階にはお年寄りが給食サービスや入浴サービスを受けられるデイサービスセンターも。４階はプールやアスレティックマシンが完備しているフィットネスフロアーです。その他学習室、マイコン室など施設面での充実はもちろんのこと、豊富な自主講座の開設を始め、市民のグループ活動の場としてなど、さまざまに活かされています。

梅本照雄館長は、ここの運営について「この施設はこどもたちから高齢者の方まで、自由に集い、語り合い、そして楽しみながら学び合うことができるよう、家族ぐるみで気軽に楽しめるイベントや、心豊かな人間性を培える教室・講座を用意して、いつまでも愛され、親しまれる運営をしていきたい。」と、話しておられます。

〒664 伊丹市南野字矢倉塚720-2
Tel 0727-81-8877
アクセス 阪急伊丹駅より伊丹市バス37系統
阪急塚口行き「稲野８丁目」下車１分
阪急塚口駅北口より伊丹市バス
37系統「阪急伊丹」行、40系統「第三師団前」行
いずれも「生涯学習センター」下車すぐ

ことば人

関西文化について

大谷　晃一

若者が軽食のマクドナルドを呼ぶときの略し方が東と西で違う。東ではマックという。原語はMacDonaldだから、マックが正しい。ところが、西ではマクドと呼ぶ。

ミスター・ドーナツは東がミスター、西はミスドである。モス・バーガーは東がモス、西はモスバである。ケンタッキー・フライドチキンはどちらもケンタだが、東は「ケ」に西は「ン」にアクセントをつける。

違いが明白である。東は入って来た元の文化を尊重する。西では原語などは全く考えない。自分流に、耳にした初めのカナの三音を使う。だれにでも分かり、使いやすい。

東は歯切れがよく、知的で、おしゃれで、通っぽい。西はもっさりして、鈍だが、人臭くて、くつろぎがある。

東の若者は大阪をダサイと軽蔑する。西は東京を植民地的だと反論する。つまり、外来文化の受入れ方が違うのである。京阪神＋奈良の関西の人びとの意識の底に、自文化へのしぶとい自信が見える。

明治の末から、西欧文化がどっと日本に入った。オペラ、訳して歌劇もその一つ。

東京の帝劇や浅草のオペラは本場直輸入でバタ臭い。ところが、同時にできた宝塚少女歌劇は純然たる西洋オペラではない。幕開けは、日本人になじみの「桃太郎」を題材にした。時代の先端をいく歌劇と、少女にも分かるおとぎ話を組み合わせる。在来の歌舞伎も洋楽化した。独特の宝塚調を作り上げる。

創始者の小林一三の理想は、日本化した良い歌劇を安い料金で大衆に見せることであった。東京の帝劇や浅草オペラは消滅し、宝塚歌劇はいよいよ盛んである。

かくて、何事によらず、東京と関西の文化は明らかに違っている。

一国に一つの文化しかないときは、必ず退廃する。二つの文化が互いに競い、補い合って、全体が向上する。

日本で、東京文化に対抗できるのは、関西文化しかないだろう。

一九二三年大阪生まれ。関西学院大学法学部卒業。朝日新聞大阪本社編集委員を経て、現在、帝塚山大学教授、㈶伊丹市文化振興財団副理事長、作家。
著書に正・続『関西名作の風土』(日本エッセイスト・クラブ賞受賞)「おんなの近代史」「生き愛し書いた――織田作之助伝」「手仕事のおんな」「現代職人伝」「評伝 梶井基次郎」「評伝 武田麟太郎」「楠木正成」「上田秋成」「楠木正儀」「大いなる坂・聖と欲の巨人 蓮如」「井原西鶴」「石山本願寺の興亡」「大阪学」「続・大阪学」などがある。伝記文学全業績により大阪芸術賞を受賞する。

アイホール演劇学校をたずねて
新しい自分に出会うために

毎週水曜日の夜七時になると、学生やOL、サラリーマン、主婦など、一日の仕事や勉学を終えた人たちが、足早にアイホールの階段を駆け上がっていきます。二階のカルチャールームでは、さっさと身支度を整えた生徒たちが、演劇学校一期生の森昌子さんの指導で、ストレッチ体操を始めています。

アイホール演劇学校は、全国でもめずらしい公共の演劇学校です。しかし、ここはプロの俳優の養成をめざすものではなく、市民が演劇づくりを体験する場として運営されています。ここで学ぶことで、豊かな感性と創造力を養ってほしい、そして演劇創造の場に立った経験から、いい観客になり、周辺に観客の輪をひろげてほしい、それがこの学校の目的です。

アイホール開設の翌年に設立されて、今年六年目になります。毎年四〇人ほどの生徒を受け入れてきましたから、すでに二百人以上の人がここで学んでいます。一年間で修了ですが、三年は在籍を認めています。今年から前期は、経験者クラスと初心者クラスに分かれています。

前期のカリキュラムは、体操、発声のあと、経験者クラスは、演出家の洞口ゆずるさんの指導で、即興のエチュードや台本の1シーンを抜き出してグループごとに演じる演技練習を行っています。洞口さんは、生徒の自主性を尊重し、自分で発見することの大切さを学んでほしいと、現実のくらしの観察などをテーマとして課しています。この日は、建て売り住宅の販売現場の観察で、この体験は、卒業公演の『グッドラックシアター』の台本の中に取り入れられる予定です。

初心者クラスの指導は、演出家の大谷　潔さんが当たっています。

後期は、経験者、初心者いっしょに、いよいよシバイの稽古に入ります。

演劇の舞台は、俳優、演出家、作者のほか、舞台監督、装置、照明、音響、衣装など多くの人の創意によってできあがります。舞台に立たなくても、力いっぱい自分の持ち場で尽くすことで、一人ひとりがすばらしい経験をすることでしょう。そしてそれは、新しい自分との出会いでもあるはずです。伊丹市の演劇文化のためだけでなく、日本の文化のために、こころからの声援を――

演出の洞口さんは、劇団〈A計劃〉を主宰する劇作家でもあります。過去五回の『グッドラックシアター』の演出をしていますが、今回は台本も洞口さんのオリジナルとか。

フィットネスラスタで体力回復・健康増進

――施設完備だから満足・公営だから安心――

ラスタホール4階にあるフィットネスラスタは、専属のインストラクターがあなたの体力に合ったプログラムを考えてくれます。現在申し込みを受け付けています。

基礎体力づくりにサイクリングコーナー

ウォークマシンは人気コーナーです

■ご利用施設
トレーニングジム、温水プール、スタジオ、ジャグジー、シャワールーム、サウナ、ロッカールーム、等々
■スポーツドクターによる健康診断も開催
■健康づくり教室も随時開催

猪原悦子さん

私は、歩くのが嫌いで、近くでも歩けなくて。それで、よそのエアロビクスの教室に通ってみたのですが、運動が激しすぎて……ここへ来るようになって、歩くのが好きになりました。いまは、神戸までででも歩けますよ。

猪原さんは、こんなにしなやか

玉川博尉さん

以前に通っていた民間のフィットネスクラブが、つぶれたので、こちらに移ったのですが、通うにも便利ですしね。

私は、『運動不足解消コース』を選んでいます。週に二、三回は来ていますよ。

トレーニングのあとはサウナで仕上げ

エアロビクススタジオ
ボディソニックサウンド、カラーライト設置

水中にまで音響と光をとり入れた温水プール
水中の鏡でフォームのチェックもOK

プール付属のジャグジー

力丸昭次郎さん

病気を直すために来てます。『間接が気になるコース』へ昨年の二月から通っているんですが、ずいぶん体力がついてきましたよ。

インストラクターもみなさん親切ですしね。

■ご使用時間
- 平日・土曜日/10:00A.M.～9:30P.M.(最終入館8:30P.M.)
- 日曜日・祝日/10:00A.M.～5:00P.M.(最終入館4:00P.M.)
- 毎週火曜日休館(ただし、祝日の場合は開館し、翌日休館)
- 年末・年始(12/29～1/3)休館。また、施設点検のため臨時休館することがあります。

■ご利用資格
- 伊丹市民等(伊丹市に在住、在勤、在学)の方で、満16歳以上の方に限ります。ただし、市民等以外の使用の場合は、料金表に定める使用料に20%プラスした額とさせていただきます。

FITNESS LUSTRE
フィットネス ラスタ
伊丹市立生涯学習センター4階……
フィットネス ラスタ
TEL.0727-81-4888

■使用種別と使用料システム

使用種別		使用料		使用内容
全日定期使用	一般	月額	7,500円	時間の制限なし
	シルバー(満60才以上)		5,000円	
平日定期使用	一般	月額	6,000円	土・日・祝を除いた平日の10:00A.M.～5:30P.M.まで
	シルバー(満60才以上)		4,000円	
一時使用	一般	1回	2,000円	時間の制限なし
			1,000円	10:00A.M.～12:00P.M.まで
	シルバー(満60才以上)		1,000円	時間の制限なし
			500円	10:00A.M.～12:00P.M.まで

※1. 月額とは、1日から月末までの使用料です。
2. スポーツ安全保険への加入をお願いします。

柿衛文庫 伊丹市立美術館 名画回廊 所蔵品紹介

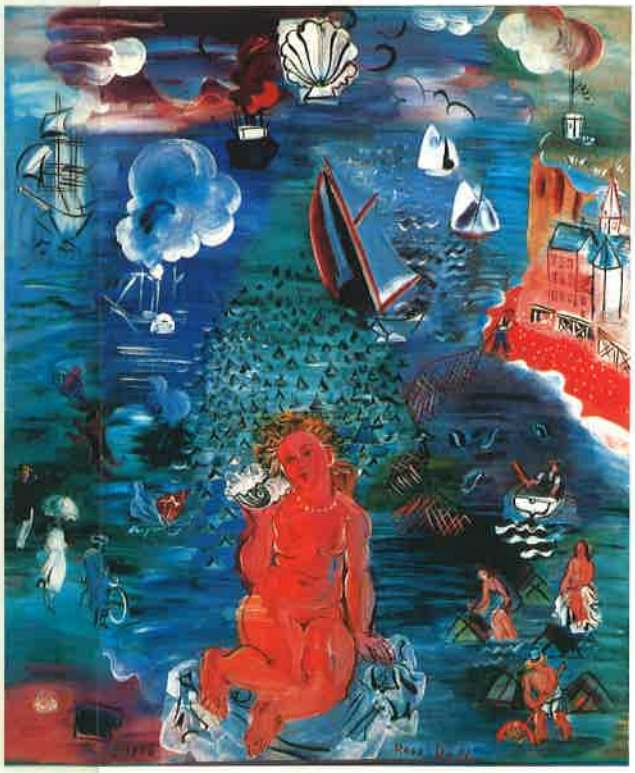
「アンフィトリテ（海の女神）」1936年 ラウル・デュフィ作

ラウル・デュフィ（1877－1953）はイギリス海峡に面したフランス北部の港町ル・アーブルに生まれる。後年、「青のデュフィ」といわれる所以は、生まれ故郷の海の青色が起因している。また、デュフィにとって、海ほど自由な空想を誘うものはなく、また、海ほど彼にとっての生きる喜びを示すものはないといってもいいだろう。

さて、デュフィは働きながら夜間の市立美術学校で絵の勉強に励む。1900年に、デュフィには新しい機会が訪れた。市から援助を得て、パリの美術学校で勉強ができるようになる。そのパリではモネやピサロの影響を受け、マティスの作品に大きく傾倒する。

アンフィトリテとは、「海の女神」の名である。デュフィはギリシャやローマの神話から多くのモチーフを採っている。汽船や帆船の行き交う海に、豊満な女神を大きく描いている。奔放に描かれた貝や雲、ヨットや船などデュフィが好んで使ったモチーフは、画面全体に海への讃歌を奏でている奏者たちである。もちろん指揮者はデュフィ自身である。この作品の明るい色彩と軽快なリズムとが、私たちの心に色彩の交響楽を大いに満喫させてくれる。

このようにデュフィの作品には、現代の絵画につきものの理屈っぽさはない。彼が私たちにメッセージしている感興を受けとめればよいのである。（伊丹市立美術館　坂上義太郎）



芭蕉筆　山吹　自画賛

財団法人柿衛文庫は、伊丹市の名誉市民で国文学者、聖心女子大学名誉教授の岡田利兵衛氏のコレクションを譲り受け、昭和五十九年十一月に開館した、全国にも珍しい俳諧文学の資料館です。俳諧のはじまりから、芭蕉・蕪村・一茶を経て子規・漱石など明治期の俳人、さらには現代俳人にいたるまで、四百年の俳諧文芸の流れが館蔵品だけでたどれます。

六千点以上におよぶ所蔵資料のなかから、芭蕉の作品を一点ご紹介しましょう。

山吹や　宇治の焙炉（ほいろ）のにほふ時
芭蕉自画　芭蕉　桃青

画面のやや左下に山吹のひと枝を描き、自句を添えています。芭蕉は山吹、なかでも一重の山吹が好きだったようです。みずから「自画」と記していますから、絵も芭蕉が描いたもの。また、この句そのものは、芭蕉の有名な句「初しぐれ猿も小蓑をほしげ也」にちなんでつけられた『猿蓑（さるみの）』の春の部に「画賛　山吹や宇治の焙炉の匂ふ時」とあるので、元禄４年（1691）春の作品と思われます。いわば、芭蕉晩年期の作ですから、書体そのものにも流麗ななかに軽みがうかがえますし、画も墨一色であっさりと描かれ、狩野派の手法は残しながらも俳画風の趣をも十分持ちあわせている作品といえるでしょう。

芭蕉は、正保元年（1644）伊賀に生まれ、元禄７年（1694）旅先の大阪で没していますから、ことし1994年は生誕350年、没後300年にあたります。故岡田利兵衛先生は、この芭蕉の筆跡が主な研究テーマでしたので、当文庫には芭蕉の直筆が多く伝わりますが、そのなかでもこの「山吹」画賛は、名品に数えられるものです。本年に当文庫が開館10周年を迎えるのを記念して、この画賛の複製を作成・頒布しているのも、そうした意味からなのです。

（柿衛文庫　今井美紀）

財団法人「伊丹市文化振興財団」は、みなさま方に質の高い文化と学習の機会を提供することにより、新しい世紀に向けて地域の文化および生涯学習の振興に寄与することを目的に設立されたものです。〔設立年月日　平成4年(1992年)2月12日　基本財産　2億円(伊丹市出捐)〕

INFORMATION（これからの事業予定ピックアップ）

アイホール

平成7年1月10日(火)～13日(金)午後7時30分開演
14日(土)～16日(月)午後1時/午後6時開演
惑星ピスタチオ『破壊ランナー』
作・演出/西田シャトナー

平成7年1月17日(金)午後7時開演
18日(土)午後2時/7時開演
19日(日)午後2時開演
AI・HALLプロディースVol.4『エリゼ』
作/北村　想（プロジェクト・ナビ）
出演/河野洋一郎（南河内万歳一座）
伊沢　勉（プロジェクト・ナビ）他

伊丹アイフォニックホール

平成7年1月27日(金)午後7時開演
アイフォニック地球音楽シリーズ28
「イタリア ヴェネツィア楽派の音楽」

平成7年2月24日(金)午後7時開演
アイフォニック地球音楽シリーズ29
「淡路人形浄瑠璃」

ラスタホール

平成７年１月８日(日)午前９時～
「第1回ラスタ新春囲碁大会」

平成７年３月24日(金)午後７時開演
「ITAMI Abend Concert Vol.40」
ハープ＆フルートの調べ

◎なお、この「いたみカルチャーニュース」は、当文化振興財団が、文化・学習情報をお知らせするために、製作したものです。「アイテム」は項目の意味ですが、意味よりもITAMIの文字が入っているので、親しみを持っていただけるのではないかとつけました。〔平成6年12月号〕